



Doctors White Paper

医師は「医師」とであると同時にひとりの「人」である。
多忙な日々の中で責任を全うし、かつ自分の人生を輝かせる秘訣は、
その人のバイタリティにあり、とみた。

オーバーナイト透析を決断した、 病院経営者としての覚悟と矜持

文／プレシオ編集部 写真／板津 亮 取材協力／増子記念病院

出会いに導かれて腎臓内科へ

全国的にも数少ない深夜長時間透析（オーバーナイト透析）を実施しているのが名古屋駅の近くにある増子記念病院だ。今回は理事長の両角「もろすみ」國男さんにお話を伺った。

虚弱体質だった子ども時代、頻繁に小児科にかかっていたため病院を身近に感じており、それが医師という仕事を意識するようになった最初だったようだ。進学するにつれ、自分に特別な才能があればその道に進めばいいが、芸術的な才能もなく救いようのない運動音痴を自覚するようになり、自問したところ自分ができることといえば勉強だった。そこで長く続けていける仕事ということも考え医学部を選んだという。

両角さんの専門は腎臓内科。医大時代は不整脈のあった母を思い循環器内科を考えていた。しかしこの出会いが考えを変えた。卒業後、研修先の病院が突然に黎明期の透析診療を始めることになった。不思議な縁だが増子病院から魅力あふれる二人の若い医師が指導に派遣された。この医師たちの下につくように命ぜられたのが両角さんを含む5名の研修医だった。二人の指導を受けるうち両角さんはその人柄に惚れ、「彼らのような魅力ある医師、腎臓内科医になれる」と思ったとのこと。

理事長としての覚悟

腎臓は24時間休まない臓器といわれている。患者の多くは時間的制約もあって4時間の透析を選択する。一方で時間をより長くかけると治療の質が良くなる。時を経て理事長となった両角さんは、所属する医師からオーバーナイト透析を一人の患者で行いたいとの相談を受けた。なぜ、一人だけなのか問うと、長時間透析は望ましいが難しい取り組みだからと言う。しかし両角さんは考えた末、「やはりやるならば病院としてしっかり体制を整えた上でやろう」と決断した。

オーバーナイト透析を利用するにはいくつかの条件がある。まずは就労・就学している患者を優先する。昼間に長時間受けられる患者にはそちらを勧めている。また夜はスタッフが少なく手薄になるため治療中にトラブルが起きる可能性の低い患者に限っている。

優れている長時間透析が普くならないのには大きな理由がある。透析時間が長くなればその分人手、医療器具等が増えるが、時間にかかわらず診療費は変わらないため、努力が報われるだけの採算性が確保できないリスクが高い。つまり経営側としては苦渋の判断のはず。しかし両角さんは自身の覚悟をこう話す。

「患者さんが長時間を費やしてでもよい透析を受けたいと希望するのであれば我々はそれに応える。それに伴ってコストは余計にかかるが、たとえ減益になってもかまわない。そ

れがこの病院のポリシーです」

その一方でこうも語る。

「『患者とその家族、職員とその家族のために』というのが病院の基本理念であり、理事長を任されたとき『この病院が誇りある腎臓病の病院として発展できるように改革してほしい』との期待に応えるために行っただけです」

患者に質の高い医療を提供したい、そして目先の利益が減ったとしてもその方針が評価されれば結果はついてくると両角さんは考えていたのである。事実、オーバーナイト透析を取り入れておよそ5年。今では日本で三本の指に数えるほどの利用者数になっている。

現場、研究、経営、行政—— そして、ときにはBARへ

両角さんは理事長となっても最前線に立っている。多忙な中でも患者の話をつくり聴き、声や顔色、動作などをよく観察し、さらには患者だけでなく家族を含め、その時に一番困っていることを一緒に共有しつつ診療にあたっている。

最先端のことにも果敢に取り組んできたという。まだ名大の研究室にいたとき、腎移植を始めようとしていた八事日赤から、腎臓内科医の協力を要請され、診療に参加し、八事日赤に腎臓内科も立ち上げた。このことが腎移植に参加した最初の腎臓内科医としての実績につながった。そういう研究熱心な姿勢が腎病理学のオーソリティとしての立場を築き、

厚生省や関連学会でのガイドラインやシステム整備、移植腎病理研究会立ち上げなどにも関わることになった出発点である。

現場で患者と向き合い、医師ら病院スタッフを統括し、行政機関にまで協力している両角さん。そんな業務のなかひと息つけるのは、行きつけのBARでその日の気分に合わせて銘柄でグラスを傾けるときだという。「お酒の話をしはじめると止まらない」と笑った。

PROFILE

両角 國男

Kunio Morozumi

1973年名古屋大学医学部を卒業後、名古屋港湾福利厚生協会臨港病院へ赴任。1976年名古屋大学医学部第三内科経て、1983年名古屋市立大学病院人工透析部 講師・助教授に就任。1990年スイス・パーセル大学病理学研究所へ留学後、2002年名古屋第二赤十字病院（現 日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院）腎臓内科部長・副院長を経て、2014年衆済会増子記念病院 理事長に就任し、現在に至る。



右:この透析室では、朝とオーバーナイトの透析治療を行っている。各ベッドにはパーテーションを設置し、プライバシーを確保している。

左:朝透析や昼間透析用の透析室。透析時間を長くする希望に応えることができる。室内は明るく天井も高く、透析中少しでも快適に過ごせるよう配慮されている。

